



人間のイメージの世界

——志水研究室～建築学科——



志水英樹教授



駅前地区のイメージ～最も日本的な部分

我々は普段歩いているとき、周囲の町並みに対して、どのように反応しているのだろうか。自分のすんでいる街ですぐ思い浮かぶ物とは何だろう。志水先生はそういった人間のイメージを主体とした非常にデリケートな部分を研究されている。

駅前地区は日本の大都市においては、日常生活の中心であり、いわば「顔」とも言うべきものであろう。その駅前地区を、人々が日常生活を通してどのように見ているか、どのようなイメージをもっているのかというようなことを、実際に現場に出て把握しようというのも先生の研究のひとつである。志水先生はできるだけ標準化されたインタビューを多数の被験者に対して行い、その解答を統計的に処理し、そこに普遍性を見つけようとする方法をとられたそう。そのインタビューとはおよそ次のようなものである。

「〇〇〇〇の街で知っているもの、思い出すものを挙げてください。何でもいいのですが。場所とか、建物とか、店とか。……」

その結果、例えば渋谷においては「ハチ公」、「道玄坂」、「パルコ」、「東急」などを想起した人が多く、特に「ハチ公」は最も多かったという。「ハチ公」は渋谷における“シンボル”として確立し、その高い物語性と歴史性はもちろんであろうが、被験者が「ハチ公」というとき、おそらく「ハチ公」を中心とする駅前

の待合わせ広場全体をイメージし、さらにその場所にまつわる様々な個人的体験を思い出しているからに違いない。これは、被験者の地区のイメージにおける中心と、実際の地区における物理的な中心とが、極めて密接に結合している例であろう。しかし一方、自由ヶ丘の駅前広場の中心に「あおぞら」の像なるものが存在している事に気付く人は少ない。先生の調査においても、ほとんど想起されていない。「外見の面で、『ハチ公』と優劣をつけることは難しい。『あおぞら』の像が『ハチ公』に比べると、どうしてそれが自由ヶ丘にあるのかという特別な意味が欠如していると理解せざるを得ない」と先生は言われる。

なぜ先生が駅前中心地区を研究対象としたかについては、先に述べた通り、日本の大都市において「顔」というべきものだからである。しかし、それだけではないようだ。先生は次のようにも語られた。「数年間にわたるアメリカ生活や、ヨーロッパ旅行からかえってきた時、日本の大都市の最も極端な美と醜を合わせ持つ部分、最も日本的でアジア的なカオスの部分が妙になつかしく思えたんです」



広い面積を占めながら記憶の薄いものの存在～銀行

我々は、ある物を直接そこに置かなくとも、目をつぶって思い出すことができる。これはイメージの記憶構造と呼ばれる。また、目に見えていて網膜には全体が映っているが脳では隅から隅まで同じウェイトで見えているわけではない。物を目の前にしても、選択的に見ているわけである。これは知覚構造と呼ばれる。街の中心地区にいた時、どういう風に見えるかというのは知覚構造の方

である。

ところで、中心地区を構成する要素の1つに必ずと言っていいくらい銀行がある。しかもかなりの大きな面積をとっている。しかし、先程言った記憶構造という面を考えると、それだけの大きな土地と良い場所にありながら、記憶の中では割とうすく、しかも中心地区にとって最も大事な時間である夕方頃には閉まって

しまう。記憶構造の中では、役割の低い銀行の今後のあり方をもう少し考えてみる必要があるのではないだろうか。銀行は、今、人々にどのように知覚されているのだろうか。中心地区を構成する重要な要素である銀行が変われば、街自体も変わるわけで、それについてどう評価していくか、ということについても先生は調査を進めておられる。



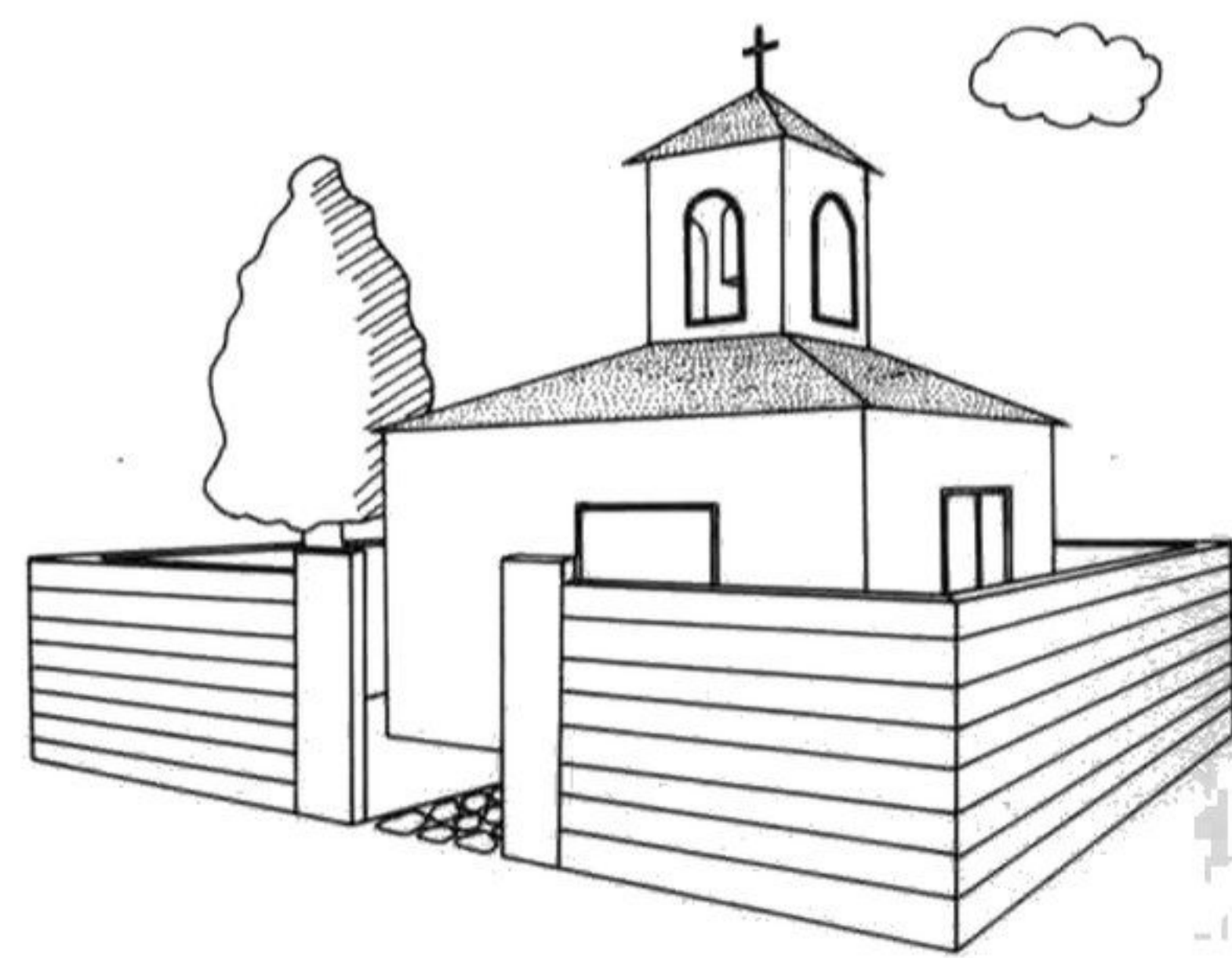
建築物による周辺地域への働きかけ

先生のもう1つのテーマとして、建築空間の周囲の外部空間がどのような様につくられているか、というのがあ。建築と外部空間の構成要素は、基本的にはごくわずかな要素で構成されているのではないかという仮説である。例えば、ヨーロッパの広場の場合を考えてみよう。まず建築物による境界によって、内側と外側にわけられる。そうすると、その内側に場所ができる。そして出入口がある。出入口ができると必ずそれに沿って通路ができる。それから、境界の内側を場所と呼ぶなら、外側には一般の民家による周域と呼ばれるあいまいな空間が広がる。しかし、外部空間を構成するには、それだけではまだ非常に殺風景である。そこで標というものがでてくる。例えば、教会の十字架、鐘楼のような物である。あるいは、先程いったハチ公のような彫像とか学校の時計台とかそ

ういう標が建築とその外部空間に意味を与える。結局、基本的な構成要素というのは、境界と場所と出入口と通路と周域とそして意味を与える標の6つになる。

この様に分類してみると、日本の現代の都市空間というのは非常に貧しいことが分かる。しかし、昔の、例えば神社や仏閣とかいった何百年にもわたって伝えられて来たものからは非常に豊かな空間が生まれている。例えば寺の山門、神社なら鳥居といったものを出入口とする参道空間である。昔の人は非常に豊富なデザイン上のボキャブラリーを持ち、それをしまっておく引出しの数も豊富で、それを色々な組合せで使っていた。しかし、現在は、そういうボキャブラリーが、非常に貧しくなっている。しかし、最近になって、例えば、マンションなどの玄関の所にちょっとした門がついたり

している。少しずつ単に住みやすいというだけでなく、ある種の外部空間に対する働きかけ、語りかけというか、建築と都市空間との間に関心が無意識に向くようになってきている。「都市空間を充実させていくためにはデザイン上のボキャブラリーを増加させていき、整理しなければならない」と先生は強調された。



先生の研究はあくまで人間のイメージが主体である。「それだけ、非常にやりがいもあり、面白いが、その反面、イメージという“得体の知れない物”を安易に定量的・統計的に扱うと危険である」といわれる一方

で、「危険であるが、今までそうした研究をやらなかったことへのツケが現在になって日本の都市空間の貧しさとして表れてきている」とも語っておられた。

(高山)